

高い木とからす

小川未明

青空文庫

はやしなか
 林の中に、一本、とりわけ高いすぎの木がありました。秋が近づくと、いろいろの渡り鳥が飛んできて、その木のいただきへとまりました。群れをなしてくるものもあれば、なかには、つれもなく、一羽だけのものもありました。

むら
 村の子供たちは、そのさえずる声を聞いて、自由に、大空を飛んでいける鳥の身の上をうらやんだのであります。

「あの木に、もちぼうをつけておけば、鳥がとれるね。」

「とつても、飼い方を知らなければ、しかたがないじゃないか。」
 友だちが、こんな話をしていると、重ちゃんが、そばから、

「どんな鳥も、すり餌をやれば、いつくんだよ。」といいました。

しかし、その木のいただきまで上れるものは、重ちやんくらいのもので、ほかの子には、目がまわるほど、あまりに高かつたのです。

ある日、新しいしらせがはいって、子供たちの間で、話に花がさきました。それというのは、からすが、あの高いすぎの木に巣をつくつたというのでした。

「それは、ほんとうかい。どうして、こんな人のたくさんなところへ巣をつくつたらうね。」

そういつた子供は、からすは、毎朝早く、まだ暗いうちから、山を出て、遠い里へいき、また晩方になると、いく組も列をなして、頭の上を鳴きながら、山へ帰るのを見たからです。

「いつか、鳥屋のおじいさんが、からすの子どもを上手に飼うとおもしろいといったよ。」と、一人がいました。

「どうしてかい？」と、ほかの一人がたずねました。

「よくなれると、人のいうことをきくし、いろいろな口まねをするって。」

「そうかい。そんなら、僕、巢をとつて、からすの子を飼おうかな。」といったのは、重ちゃんでした。

「重ちゃん、およろしよ。からすは親孝行の鳥だと、うちのおばあさんがいったよ。子供の時分、やしなってもらったご恩を忘れないで、大きくなると、年とつた親を食べさせてあげるって。」と、一人の子がいました。

すると、別の子が、

「学校の先生は、からすは害鳥だ。まいた豆や麦をほじくりだして食べるから、畑へきたら、追っばらえといったよ。」
といました。

重ちゃんは、どちらが正しいだろうかと、だまって、聞いていました。

しかし、重ちゃんは家へ帰ると、物置から、あいている鶏かごを取り出して、きれいにそうじしました。それから、ひとりで林の方へといきました。

林へきてみると、高いすぎの木が、ほかの木立を見おろして、こんもりとした姿で、そびえていました。青い空と、白い雲が、

足ばやに走あしつていましました。このとき、どこからかもどつたからすが、木きの下したに人ひとの立たつてゐるのを見みつけると、警けい戒かいするように、カア、カアと、仲なか間まを呼よびました。

重じゆうちゃんうは、自じ分ぶんも、友ともだちの助たすけなしに、ひとり木きに上のぼつて、巢すをとれないときとつたので、この日ひは、そのまま帰かえることになりました。

ところが、あくる日ひは、ひどい風かぜでありました。おじいさんは庭にわへ出でて、たななにのつてゐる鉢はちをかたづけていられました。

「おじいさん、台たい風ふうだろうかね。」と、重じゆうちゃんうは聞ききました。「とうとうやつてきたな。この風かぜは、いまにもつとひどくなるだろう。」と、おじいさんはおつしやいました。

そのうち、雨と風がもつれあつて、ますますひどくなり、はたして、家も木立も、地上にあるいつさいのものが、もみくちやにされそうに見えました。

重ちゃんじゆうちゃんは、またおじいさんのそばへいって、

「この風では、鳥の巢なんか、飛んでしまふだろうね。」と、聞ききました。

「どこかに、巢があるのか？」と、おじいさんはいわれました。

「あの高いすぎの木に、からすが巢をつくつたんだよ。しかし、木が大波にもまれるようだろう。」

「だが、からすはりこうな鳥だから、日ごろ、こんなときの用心ようしんをしているかもしれない。」と、おじいさんはおっしゃいま

した。

これを聞くと、重ちゃんは、急にからすがいとしくなりました。小さな鳥の身ながら、よく大きな自然の力にうちかとうとする精神をもつものだ、と考えたからです。それなのに、自分がその巢をとつていいものだろうか。雨風の音に、耳をすましながら、「どうか、からすの巢がぶじでありますように……。」と、重ちゃんは神に祈りました。

台風は、晩方までに去つたとみえて、夜は、星が、きらきらとかがやきました。そして、めつきり涼しくなりました。あくる日、林へいってみると、ほかの木立は、枝が折れたり、葉がちぎれたりしていたけれど、すぎの木は、もとのままの姿で、

高くそびえていました。からすの巣もぶじで、親がからすは早くか
 ら、子供たちのために餌さがしに出かけ、やがて帰ると、待ちわ
 びていた子からすが、巣の中で、しきりに鳴くのが聞こえました。
 重ちゃんじゆうは、自分じぶんも、りっぱな人間にんげんとなるために、ふだん、
 その心こころがけを怠おこたつてならぬと、感かんじました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「僕の通るみち」南北書園

1947（昭和22）年2月

初出：「らくみん三年生」

1946（昭和21）年9月

※表題は底本では、「高《たか》い木《き》とからす」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

高い木とからす

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>